

〔書評〕

歌集『夏至南風』伊良部喜代子

九里 順子

「伊良部喜代子」は、本学科二〇一一年度の卒業生、杉浦喜代子氏の歌人としての筆名である。本書は、二〇一七年六月に刊行された第二歌集。約十二年間の四三五首を収める。「あとがき」によれば、タイトルの「夏至南風」は、氏の故郷、沖縄の言葉で、夏至に吹く強い南風のことであり、地域により「カーツーバイ」「カーチーバー」等、いくつかの呼び名があるという。

タイトルが象徴するように、本歌集は、伊良部氏の故郷への思いが底流している。それは、命に根差した世界観である。本源的な命の感受は、目に見えない向こう側の次元へと通路を開く。

猛禽の棲む森に建つ図書室にねっとり読む『日本霊異記』（夢死）

泥田に命ことほぎ朝夕を祝詞のごとし蛙の声は（這う）

風死して蟬の鳴き止み西方よりかあなかあんと夕暮きたる（安堵）

てのひらにダンゴ虫のせ笑みこぼす幼のからだふと

水のごとし（清ら水の児）

伊良部氏は、古代人の魂と交感し、蛙の声の奥処を聴き取る。蛙の声の歌は、茂吉を想起させるが、幻想的というより、野太い響きがある。それは、〈生〉を支えている数多の〈死〉に届いているということである。蟬の歌の「かあなかあんと」というオノマトペは、浄土からの反響のようで卓抜である。そしてこれらの底には、命の瑞々しさを「水のごとし」と受け止める純度の高い身体性がある。

本歌集には「寂しさ」「孤独」という語が散見されるが、この世に生まれ落ちることの本質に気付かせてくれる。それは、数多の魂が棲む場所から引き離されて、一人放り出されたということである。

日ごと夜ごと芽吹きふくらむ森に来て訳なくわれに湧きくる寂しさ（春 幻夢）

屈まりて水飲む猫の尾がゆるる足らうというも少し寂しく（渦巻く）

六千度の埧塙の孤独太陽はたえずおののき炎の風吹かす（同）

寄り添うは美しされど茫々たる野に立つ一樹の孤独こそよけれ（鉄砲ゆり）

芽吹きがざわめく森に来て切り離された個の命を思い、小さな生き物の素朴な充足にも、巨大な太陽の燃焼にも、

それぞれの寂しさを感じ取る。他と置き換えが利かない固有性は、宿命的な孤独でもある。

しかし、氏は、そんな孤独に内閉するのではない。「二樹の孤独」の歌は、肚を括った生き方の投影である。それは、社会や国家への真つ当な批判へと展開する。

琉球銀行、沖縄銀行ならび建つ何か哀しきひび割れの歴史（「陵墓」）

「ウプヤマトウ」と慣れ呼びし日本を見ずに逝きたる祖母の幸い（同）
ウプヤマトウ＝大いなる日本。

戦争は増殖している 夏空をぐわらぐわらと戦闘機ゆく（「悲憤」）

これらの歌は、沖縄に刻印された「本土」との関係性を如実に物語る。ここでも氏の鋭敏な耳は「ぐわらぐわら」と威嚇の響きを的確に捉える。

あめかぜも原発一つも制御できぬ人間が宇宙に住む夢を追う（「ボヘミアン」）

古き良き日本とぞ言う古き良き日本に絶えざる戦の歴史（「不穏」）

この国の現在を指摘して痛烈である。

三・一一を含め人の世の惨事を深く心に刻みつつ、氏は次のように歌う。

朱夏 うっそうたる森をさ迷いし今日という日がすべてでありき（「さやぐ」）

どうしても言わねばならぬ言葉などありはしないよ
枯葉ふりつむ（「言葉」）

相聞と挽歌あやなす詩の海にほとりほとりと言葉を落とす（同）

限りある命と言葉は繋がっている。人はそれを痛切に感じてきたからこそ、恋の切なさや死を悼む心を不完全な言葉に託してきた。伊良部氏もそのような歌の系譜に立っている。命の発露としての言葉を調べに乘せる紛れもない歌人なのである。

（現代女性歌人叢書②）ながらみ書房 二、五〇〇円＋税